

日本国民文学全集
29

昭和名作集
Ⅲ

河出書房版

日本国民文学全集 第二九卷 昭和名作集(三)

昭和三十一年四月三十日初版印刷

昭和三十一年五月五日初版発行

定価三四〇円



著者代表

武者小路実篤

発行者

河出孝雄

印刷者

川口芳太郎

発行所 株式会社 河出書房

東京都千代田区神田小川町三ノ八

電話(二九)三七二番

振替東京一〇八〇三番

図書印刷株式会社印刷・小原製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

昭和名作集(三)

谷崎潤一郎

蓼喰ふ蟲

一

永井荷風

盪東綺譚

三

志賀直哉

暗夜行路

三

武者小路實篤

愛と死

二九七

徳田秋聲

縮圖

三三

解説

瀬沼茂樹 四三

装幀 原弘

蓼

喰

ふ

蟲

谷

崎

潤

一

郎

その一

美佐子は今朝からとき／＼夫に「どうなさ

る？ やつぱりいらつしやる？」ときいてみるのだが、夫は例の執方つかずないまいな返辭をするばかりだし、彼女自身もそれならどうと云ふ心持もきまらないので、ついぐづぐづと晝過ぎになつてしまつた。一時ごろに彼女は先へ風呂に這入つて、どつちになつてもいゝやうに身支度だけはしておいてから、まだ寝ころんで新聞を讀んでゐる夫のそばへ「さあ」と云ふやうに据わつてみたけれど、それでも夫は何とも云ひ出さないのである。「兎に角お風呂へお這入りにならない？」

「うむ、……」

座布団を二枚腹の下へ敷いて疊の上に頬杖をついてゐた妻は、着飾つた妻の化粧の匂ひが身近にただよふのを感じると、それを避けるやうな風にかすかに顔をうしろへ引きながら、彼女の姿を、と云ふよりも衣裳の好みを、成るべく視線を合はせないやうにして眺めた。彼は妻がどんな着物を選んだか、その工合で自分の氣持も定まるだらうと思つたのだが、生憎なことには此の頃妻の持ち物や

衣類などに注意したことがないのだから、——ずゑん衣裳道楽の方で、月々何の彼のと拵へるらしいのだけれども、いつも相談に與つたこともなければ、何を買つたか氣をつけたこともないのだから、——今日の装ひも、たゞ花やかな、或る一人の當世風の奥様と云ふ感じより外には何とも判斷の下しやうもなかつた。

「お前は、しかし、どうする氣なんだ」

「あたしは執方でも、……あなたがいらつしやれば行きますし、……でなければ須磨へ行つてもいゝんです」

「須磨の方にも約束があるのかね？」

「いゝえ、別に。……彼方は明日だつていいんですから」

美佐子はいつの間にかマニキュールの道具を出して、膝の上でセッセと爪を磨きながら、首は眞つすぐに、夫の顔からわざと一二尺上の方の空間に眼を据ゑてゐた。

出かけるとか出かけないとか、なか／＼話がかないのは今日に限つたことではないのだが、さう云ふ時に夫も妻も進んで決定しようとはせず、相手の心の動きやうで自分の心をきめようと云ふ受け身な態度を守るので、ちやうど夫婦が兩方から水盤の縁をさ／＼へて、平らな水が自然と執方かへ傾くの待つてゐるやうなものであつた。そんなふうにしてとうとう何もきまらない内に日が暮れてしまふこともあり、或る時間が來ると急に夫婦の心

持がびつたり合ふこともあるのだけれど、要には今日は豫覺があつて、結局二人で出かけるやうになるだらうことは分つてゐた。が、分つてゐながら矢張受動的に、或る偶然がさうしてくれるのを待つてゐると云ふのは、あながち彼が横着なせゑばかりではなかつた。第一に彼は妻と二人きりで外を歩く場合の、

——此處から道頓堀までのほんの一時間はかりではあるが、お互の氣づまりな道中が思ひやられた。それに、「須磨へ行くのは明日でもいい」と妻はさう云つてゐるものゝ、多分約束がしてあるのであらうし、さうでない迄も、彼女に取つては面白くもない人形芝居を見せられるより、阿曾の所へ行つた方がいゝにきまつてゐることを察してやらないのも氣が濟まなかつた。

ゆうべ京都の妻の父から「明日都合がよかつたら夫婦で辨天座へ来るやうに」と云ふ電話があつたとき、一往妻に相談すべきであつたのだが、折あしく彼女が留守だつたので、「大概ならばお伺ひいたします」と、要はうっかり答へてしまつた。それと云ふのが、僕は長いこと文樂の人形を見たことがありませんので、今度おいでになる時には是非誘つていただきたい」と、いつぞや老人の機嫌を取るために心にもないおあいそを云つたのを、老人の方ではよく覺えてゐてわざ／＼知らしてくれたのであるから、彼としては斷りにくい場合でもあつたし、それに人形芝居は兎に角、

あの老人に付き合つてゆつくり話をするやうな機會が、ひよつとしたらもう此れつきり来ないであらうと思へたからだつた。鹿ヶ谷の方に隠居所を作つて茶人じみた生活をしてゐる六十近い年寄りとは、もちろん趣味が合ふ譯もなし、何かにつけてうるさく通を振りまかれるのにはいつも閉口するのだけれど、若い時に散々遊んだ人だけあつて何處か洒落な、からつとしたところのあるのが、もうその人とも親子の縁が切れるかと思へばさうになつかし、少し皮肉な云ひ方をすれば、妻よりもむしろ此の老人に名残りが惜しまれて、せめて夫妻である間に一ぺんぐらゐは親孝行をしておいても、柄にないことを考へたのだが、しかし獨斷で承知したのは手落ちと云へば手落ちである。いつもの彼なら妻の都合と云ふことに氣が廻らない筈はないのである。ゆうべも勿論それを思ひはしたけれども、實は夕方「ちよつと神戸まで買ひ物に」といつて彼女が出かけて行つたのを、恐らく阿曾に會ひに行つたものと推してゐた。ちやうど老人から電話がかゝつた時分には、妻と阿曾とが腕を組み合つて須磨の海岸をぶらついてゐる影繪が彼の脳裡に描かれてゐたので、「今夜會つてゐるのなら明日は差支へないであらう」と、ふとさう思つた譯なのであつた。妻は從來かくし立てをしたことはなかつたから、ゆうべは事實買ひ物に行つたのかも知れない。それをさうでなく取つたのは彼の

邪推であつたかも知れない。彼女は、うそをつくことは嫌ひであるし、又、そをつく必要はないにきまつてゐるのだから。が、夫に取つて決して愉快でない筈のことをさうハツキリと云ふまでもないから、「神戸へ買ひ物に行く」といふ言葉の裏に「阿曾に會ひに行く」と云ふ意味が含まれてゐたものと解釋したのは、彼の立ち場からは自然であつて、悪く感づつた譯ではなかつた。妻の方でも要が邪推や意地惡をしたのでないことは分つてゐるに違ひなかつた。或は彼女は、ゆうべ會ふことは會つてゐるのだが、今日も會ひたいのであるかも知れない。最初は十日置き、一週間置きぐらゐだつたのが、近頃は大部分頻繁になつて、二日も三日もつづけて會ふことが珍しくないのであるから。

「あなたはどうかの、御覽になりたいの？」
要は妻が這入つたあとの風呂へ漬かつて、湯上りの肌へバスローブを引つかけながら十分ばかりで戻つて來たが、美佐子はその時もぼんやり空を見張つたまま機械的に爪をこすつてゐた。彼女は縁側に立ちながら手鏡で髪をさばいてゐる夫の方へは眼をやらすに、三角に切られた左の拇指の爪の、ぴか／＼光る尖端を間近く鼻先へ寄せながら云つた。
「僕もあんまり見たくはないんだが、見たいツて云つちまつたんでね。……」
「いつ？」

「いつだつたか、さう云つたことがあるんだ

よ。ひどく熱心に人形芝居を讚美するものだから、つい老人を喜ばすつもりで合ひ槌を打つてしまつたんだ」

「ふ」と、彼女は、あかの他人に對するやうな、いそ笑ひを笑つた。

「そんなことを仰つしやるから悪いんぢやないの。いつもお父さんに付き合つたことなんかない癖に」

「まあ兎に角、ちよつとだけでも行つた方がいゝんだけれどな」

「文樂座つて一體どこなの？」

「文樂座ぢやあないんだよ。文樂座は焼けちまつたんで、道頓堀の辨天座といふ小屋なんださうだ」

「それぢやどうせ据ゐるんでせう？ 敵はな
いわ、あたし、——あとで膝が痛くなつち
まふわ」

「そりやあ茶人の行くところだから仕方がないやね。——お前のお父さんも先にはあんなぢやあなかつたし、活動寫眞が好きだつた時代もあつたんだが、だん／＼年を取ると連れて趣味が皮肉になつて行くんだね。此の間或る所で聞いたんだが、若い時分に女遊びをした人間ほど、老人になるときまつて骨董好きになる。書畫だの茶器だのをいぢくるのはつまり性慾の變形だと云ふんだ」

「でもお父さんは性慾の方もまだ變形してゐないんぢやないの。今日だつてお久が附いて

あるでせう」

「あゝ云ふ女を好くといふのがやつぱりいくらか骨董趣味だよ。あれはまるで人形のやうな女だからな」

「行けばきつとアテられてよ」

「仕方がない、それも親孝行だと思つて、一時間か二時間アテられに行くさ」

ふと要は、妻が何となく出遊するのは外に理由があるんぢやないのかな、とその時感したが、「では今日は和服になさる？」

と、彼女は立つて、簞笥の抽出しから、たうに包まつた幾組かの夫の衣類を取り出すのであつた。

着物にかけては要も妻に負けない程の贅澤屋で、此の羽織には此の着物に此の帯と云ふ風に幾通りとなく揃へてあつて、それが細かい物にまでも、——時計とか、鎖とか、羽織の紐とか、シガーケースとか、財布とか、そんな物にまでおよんでゐた。それを一々呑み込んでゐて、「あれ」と云へば直ぐその一と組を揃へることの出来るものは美佐子より外にないのであるから、此の頃のやうに夫を置いて一人で外へ出がちの彼女は、出かける時に夫のために衣類を揃へて行くことが多かつた。要に取つて現在の妻が實際妻らしい役目をして、彼女でなければならぬ必要を覺えるのは、たと此の場合だけであるので、さう云ふ時にいつでも彼は變にちぐはぐな思ひをした。殊に今日のやうに、うしろから裾袂を着

せてくれたり、襟を直してくれたりとされると、自分たち夫婦と云ふものの随分不思議な矛盾した關係が、はつきり感ぜられるのであつた。誰が斯う云ふ場面を見たら、自分たちを夫婦でないと思ふであらう。現に家にゐる小間使にしても下女にしても、夢にも疑つてはゐないであらう。彼自身ですら、かうして下着や足袋の面倒までも見て貰つてゐる自分を顧みれば、これでどうして夫婦でないのかと云ふやうな氣がする。何も閨房の語らひばかりが夫婦を成り立たせてゐるのではない。一夜妻ならば要は過去に多くの女を知つてゐるが、かういふ細かい身の周りの世話や心づくしの間にこそ夫婦らしさが存するのではないか。これが夫婦の本來の姿ではないのか。さうしてみれば、彼は彼女に不足を感じる何もものもないのである。……

両手を腰の上へ廻してつづれの帯を結びながら、彼はしやがんでゐる妻の襟足を見た。妻の膝の上には彼が好んで着るところの黒八丈の無双の羽織がひろがつてゐた。妻はその羽織へ刀の下げ緒の模様に染めた平打ちの紐を着けようとして、毛ビンの脚を乳へ通してゐるのである。彼女の白いてのひらは、それが握つてゐる細い毛ビンを一とすぢの黒さにくつきりと際立たせてゐた。研ぎ立ての光澤の爪が、指頭と指頭のカチ合ふ毎に尖つた先をキキと甲斐絹のやうに鳴らした。長い間の習慣で夫の氣持を鋭く反射する彼女は、自

分も同じ感傷に惹き込まれるのを恐れるかのやうに殊更隙間なく身を動かして、妻たるものゝなすべき仕事をさつさと手際よく、事務的に運んでゐるのであるが、それだけに要は、彼女と視線を合はせることなく餘所ながら名残りを惜しむ心で偷み視ることが出来るのであつた。立つてゐる彼には襟足の奥の背すぢが見えた。肌襦袢の蔭に包まれてゐる豊かな肩のふくらみが見えた。疊の上を膝ですつてゐる裾さばきの袴の下から、東京好みの、木型のやうな堅い白足袋をびちりと振めた足頸が一寸ばかり見えた。さう云ふ風にちらと眼に觸れる肉體のところへは、三十に近い歳のわりには若くもあり水々しくもあり、これが他人の妻であつたら彼とても美しいと感ずるであらう。今でも彼は此の肉體を嘗て夜な夜なさうしたやうに抱きしめてやりたい親切はある。たと悲しいのは、彼に取つてはそれが殆ど結婚の最初から性的に何等の魅力もないことだつた。さうして今の水々しさも若しきさも、實は彼女に數年の間後家と同じ生活させた必然の結果であることを思ふと、哀れと云ふよりは不思議な寒氣を覺えるのであつた。

「ほんたうに今日は——」

さう云ひながら美佐子は立つて、羽織を着せるために夫の背中の方へ廻つた。

「——いゝお天氣ちやありませんか。芝居なんぞには勿體ないくらゐだわ」

要は二三度彼女の指が項のあたりをかすめたのを感じたが、その肌觸りにはまるで理髪師の指のやうな職業的な冷めたさしかなかった。

「お前、電話をかけて置かなくつてもいいの、かね？」

と、彼は妻の言葉の裏を尋ねた。

「ええ、……………」

「かけてお置きよ、でないと僕も氣が済まないから、……………」

「それにも及ばないんだけど、……………」

「しかし、……………待つてゐると悪いぢやないか」

「さうね、……………」

彼女はちよつとためらつてから云つた。

「……………何時頃に歸れますかしら？」

「今から行けば、假りに一と暮だけとしても五時か六時にはなるだらうな」

「それからちやあんまり遅いでせうか？」

「そんなことは差支へないが、何しろ今日はお父さんの都合でどうなるか分りやしないぜ。一緒に晩飯を附き合へとも云はれたら斷る譯にも行かないし、……………ま、明日にした方が間違ひがないよ」

さう云つてゐる時、小間使ひのお小夜が襖を開けた。

「あのう、須磨から奥様にお電話でございます」

その一

電話口の話は十分もかゝつたけれども、それでも漸く須磨の方は明日にすると云ふことになつて、一層浮かぬ顔つきをししながら、彼女が夫と珍しく連れ立つて出たのは、もう二時半を過ぎた頃だつた。

たまたに日曜の折などに、小學校の四年へ行つてゐる弘を中に挟みながら、親子三人で出かけることはないでもないが、それは近頃、うすうす父と母との間に何事かと醸されつゝあるのを感じたいらしい子供の恐怖を取り除けるためで、今日のやうに夫婦が二人で出歩くことはほんたうにもう幾月ぶりか分らなかつた。弘が學校から歸つて來て、父と母とが手を携へて出たことを聞いたら、自分が置いて行かれたのを淋しがるよりも、實はどんなに喜ぶであらう。……………しかし要は、それが子供にいゝ事だか悪い事だか判斷に迷つた。ゼんたい「子供々々」と云ふが、既に十歳以上になれば、氣の廻り方は格別大人と變つたこととはないのである。彼は美佐子が「外の者は氣が附かないのに、弘は知つてゐるらしいんですよ、とても敏感なんですから」と云つたりするのを、「そんなことは子供としては當り前だよ。それを感じるなんかは親馬鹿と云ふもんだ」と、さう云つて笑ふのが常であつた。それ故彼は、いざと云ふ時は大人に對すると同じやうに、すべての事情を子供に打ち

明ける覺悟をしてゐた。父も母も、執方が悪いと云ふのではない、もしも悪いと云ふ者があれば、それは現代に通用しない古い道徳に囚はれた見方だ、これからの子供はそんなことを耻ぢてはいけな、父と母とがどうならうともお前は永久に二人の子だ、さうしていつでも好きな時に父の家へも母の家へも行くことが出来る、……………彼はさう云ふ風に話して子供の理性に訴へるつもりであつた。それを子供が聴き分けけない筈はないと思つた。子供だからと云つていゝ加減なうそをつくの、大人を欺くのと同じ罪惡だと考へてゐた。ただ萬一にも別れないで済む場合が想像せられるし、別れるとしてもまだその時機がきまつたと云ふ譯ではないので、成るべくならば餘計な心配をさせたくない、話はいつでも出来るのだからと、さう思ひ／＼つひ延び／＼になつてゐる結果は、やはり子供を安心させたさに惹き擦られて、喜ぶ顔が見たいために妻と馴れ合ひで陸しい風を装ふこともあるのである。しかし子供は子供の方で、二人が馴れ合ひで芝居をしてゐることまでも感づいてゐて、なか／＼氣を許してはゐないらしい。うは、べはいかにも嬉しさうにして見せるけれども、それも事に依ると親たちの苦慮を察して、子供の方があべこべに二人を安心させようと努めてゐるのかも知れない。子供の本能と云ふものはさう云ふ時に案外深い洞察力を働かすものゝやうに思へる。だから要は親子三人

で散策に出ると、父は父、母は母、子は子と云ふ風に、三人が三人ながらバラバラな氣持を隠しつゝ心にもない笑顔を作つてゐる状態に、我から慄然とすることがあつた。つまり三人はもうお互に欺かれぬ、夫婦の馴れ合いが今では親子の馴れ合いになり、三人で世間を欺いてゐる。——なんで子供にまでそんな眞似をさせなければならぬのか、それが彼にはひとしほ罪深く、不愜に感ぜられるのであつた。

彼はもちろん自分たちの夫婦關係を新道德の先驅者のやうな態度を以て社會へ觸れ廻る勇氣はなかつた。自分の行つてゐることには多少の恃むところもあり、良心に耻ぢる點はないのであるから、まさかの場合は敢然として反抗しないものでもないが、さうかと云つて、強ひて自分を不利な立場に置きたくはなかつた。父の代ほどではないにもせよまだ幾らかの資産もあり、名義だけでも會社の重役といふ地位もあり、かつ／＼ながら有閑階級の一員として暮して行くことの出来る身として、なるべくならば社會の隅に小さく、つましく、あまり人目に立たないやうに、そして先祖の位牌にも傷をつけないやうにして安穩に生きて行きたかつた。假りに自分は親戚などの干渉を恐れるところはないにしても、自分より一層誤解され易い妻の立ち場を庇つてやらなければ、結局夫婦は身動きが取れなくなる。たとへばこの頃の妻の行爲があるの

まゝに京都の父親にでも知れたら、いかに物分りのいゝ老人でも世間の手まへ娘の不埒を許しては置けないであらう。もしさうなれば彼女は要と別れたとしても、思ひ通りに阿曾の所へ行けるかどうか疑問である。「親や親類の壓迫なんかあたしちつとも恐くはないわ、みんなに義絶されたつて構はない積りでゐるんですから」と、いつもはさう云つてゐるけれども、事實そんなことが出来るかどうか。彼女について事前に悪い噂が立てば、阿曾の方にも親や兄弟がある以上、さう云ふ方面からの故障も豫想せられた。そればかりでなく、母が日蔭者のやうになつては、それが子供の將來に及ぼす影響も考へなければならぬ。要はいろ／＼の事情を思ふと、別れた後にも互が幸福に行けるやうにするには、餘程上手に周囲の人たちの理解を求める必要があるのだ、平素から用心深く世間に氣取られないやうにしてゐた。夫婦はそのために少しづつ交際の範圍を狭くし、努めて牆の内を覗かれないやうにさへした。が、それでも矢張對社會的に夫婦らしさを装はなければならぬ場合が生じて來ると、いつもあんまり好い心持はしないのであつた。

思ふに美佐子がさつきから變に出遊つてゐたのも、一つはそれが厭なのであらう。氣の弱い性質なのではあるが、何處か奥の方にカチリと堅い芯を持つてゐる彼女は、古い習慣とか、義理とか、情實とか、さう云ふものに對

してはむしろ要よりも勇敢であつた。彼女は夫と子供のために出来るだけ憤しんでゐるものゝ、而も今日のやうな時に進んで人の前へ出てまで芝居をするには及ばないと云ふ風な、かすかな不平を抱いてゐるに違ひなかつた。なぜなら彼女にしてみれば己を欺き世を欺くのが不愉快であるばかりでなく、阿曾の感情をも考へなければならぬからだつた。阿曾も事情は認めてゐるにしろ、彼女が夫と道頓堀へ出かけたに聞いたら兎に角愉快である筈はない。眞に己むを得ない場合の外は、さう云ふことは遠慮して欲しいに違ひない。夫はそこまでの思ひやりのないのか、察してゐてもそんなことにまで氣がねをしてはゐられないと云ふ腹なのか、さうとはつきり口へ出しては云へないだけに彼女はもどかしく感ずるのであつた。夫は何故に今ごろになつて老人の機嫌を取らうとするのか。彼女の父が夫に取つても永久に父であり得るならば知らぬこと、もう近々に「父」と呼ぶことも出来なくなるのに、それを今更附き合つたところで無益ではないか。なまじ孝行の眞似などをすれば後で事實が知れた時に一層怒らせるやうなものではないか。

夫婦はそんなやうに別々の心を抱いて阪急の豊中から梅田行きの電車に乗つた。三月末の彼岸さくらが綻びそめる時分のこと、きらきらしい日ざしの底にまだ何處となく肌寒さが感ぜられたが、要はうすい春外套の袂の外

へこぼれてゐる黒八丈の羽織の生地が、窓の明りで干潟の沙のやうに光るのを見た。和服の時は寒中でもシヤツを着けないのを身だしなみの一つにしてゐる彼は、長襦袢の裏と皮膚とのあはひに清涼な風の孕むのを覚えながら内ふところへ兩手を入れてゐた。車の中は時間が半ばであるせぬか疎らな客がめい／＼ゆつくりと席を取り、眞新しい白ベンキの天井の下は空氣が隅まで透き徹つてゐて、並んでゐる人たちの顔までが皆健康さうに、朗らかに明るい。美佐子はそれらの顔の中にわざと夫と向ひ側にかけて鼻のあたを毛皮の襟巻のふか／＼とした中へ埋める程にして、縮刷本の水沫集を讀んでゐるのである。買ひ立ての白クロースの、ブリキのやうにピンと尖つた表紙の背を握んでゐる指には網目に編んだサファイア色の絹の手袋が嵌まつてゐて、こまかい網の目の隙間から、研かれた爪がチラチラと覗いてゐた。

電車の中で彼女がかう云ふ位置を取るのは、それが殆ど二人で外出する時の習慣のやうになつてゐた。子供がゐればその右左へかけるけれども、さうでなかつたら大概の場合、一人が腰をおろすのを待つて一人が反對の側の方へ席を求める。夫婦は互に衣を隔てゝ體溫を感じ合ふことが窮屈であるばかりでなく、今では寧ろしてはならないことのやうに、不道德なやうにさへ思ふのである。そして一つの車室のうちに向ひ合つて置かれるだけでも

相手の顔が邪魔になるので、美佐子はいつとも眼の向けどころを作るために何かしら讀む物を用意してゐて、席がきまると直ぐに自分の鼻先へ屏風を立てゝしまふのである。二人は梅田の終點で降りて別々に持つてゐる回数券を渡して、申し合はせたやうに二三歩離れて歩きながら驛の前の廣場へ出ると、夫が先に、妻がその後から黙つてタキシードの箱の中へ収まつて、始めて夫婦らしく肩を並べた。もし第三者が四つのガラス窓の中に閉ぢ込められた彼等を見たなら、二つの横顔が額と額と、鼻と鼻と、額と額とを押繪のやうに重なり合はせて双方が脇眼をふることなく、じつと正面を切つたまゝで車に揺られつゝ行くさまに氣づいたであらう。

「何をやつてゐるんですの、一體？」

「ゆうべの電話では小春治兵衛と、それから何だとか云つてゐたつてが、……」

互に長い沈黙に壓し出されたやうな工合に、一と言つゝ口をきいた。けれども矢張正面を切つたまゝだつた。妻には夫の、夫には妻の、鼻の頭だけが仄白く映つた。

辨天座のありかを知らない美佐子は、戎橋で乗り物を捨てゝから再び黙つて附いて行くより外はなかつたが、夫は電話で委しく教はつたものと見えて、道頓堀のとある芝居茶屋を訪ねて、そこから仲居に送られて行くのである。いよ／＼父の前へ出て妻の役目をしなければならぬ、さう思ふと彼女は一層氣が重

くなつた。土間へ陣取つて娘よりも若いお久を相手に、杯のふちをなめては舞臺の方を見入つてゐる年寄りの姿が眼に浮かんた。父もうつたうしいけれども、それよりお久がいいやであつた。京都生れの、おつとりした、何を云はれても「へい／＼」云つてゐる魂のないやうな女であるのが、東京ッ兒の彼女と肌が合はないせぬもあるであらう。が、お久と云ふものを傍へ置くと、父が何だか父らしくなく、淺ましい爺のやうに見えて來るのが此の上もなく不愉快なのである。

「あたしと暮だけ見たら歸るわよ」

と、彼女は木戸口を這入りながら、そこまでびん／＼と響いて來る時代後れな太棹の餘韻に反抗するやうな氣持で云つた。

茶屋の女に送られて芝居小屋へ來ると云ふことが、既に何年ぶりであらう。要は下駄を脱ぎ捨てゝ足袋の底に冷めたい廊下のすべ／＼した板を踏んだとき、一瞬間遠い昔の母のおもかげが心をかすめた。藏前の家から俥の上を母の膝に乗せられて木挽町へ行つた五つ六つの頃、茶屋から母に手を曳かれて福車履を突つかけながら、歌舞伎座の廊下へ上るときがちやうどこんな工合であつた。子供の彼は矢張足袋の底に冷めたい板の間を踏んだ。さう云へば舊式の芝居小屋は木戸口をくゞつた時の空氣が妙に肌寒い。いつも晴れ着の裾や袂からすう／＼と風が薄荷のやうに體へ沁みたるを未だに記憶してゐるが、その肌寒さは恰も

梅見頃の陽氣の爽やかさに似てぞくぞくしながらもこゝちよく、「もう幕が開いてゐるんですよ」と母に促がされて小さな胸をときめかせつゝ走つて行つたものであつた。

けれども今日の寒さばかりは廊下よりも客席の方がひとしほで、夫婦は花道を傳つて行くときに何とは知らずに手足が引き締まるやうな氣がした。見わたしたところ、小屋は相當の廣さであるのに四分通りしか入りがなく、場内の空氣は街頭を流れるすすうした風と變りがなく、舞臺に動いてゐる人形までが首をちよめて、淋しく、あちきなく、見るから哀れに、それが太夫の沈んだ聲と三絃の音色とに不思議な調和を保つてゐた。殆ど平土間の三分の二まではガラ空きになつてゐて、ほんの舞臺に近い方に人がかたまつてゐる中に、顛頂部の禿げた老人の頭とつや／＼しいお久の圓鬚とが遠くの方から眼についてゐたが、渡りを渡つて降りて来る二人にお久はそれと心づく。

「お越しやす」

と小聲で云ひながら居すまひを直して、場を塞いでゐる時繪の提げ重を、一つ／＼丁寧に積み重ねて自分の膝の前に寄せた。

「お越しやすたえ」

美佐子のために老人の右の席をあけて、自分はいししろに長まつてゐるお久は、さう云つて耳打ちをしたけれども、老人はちよつと振り返つて、

「やあ」

と云つたきり、一心に舞臺の方へ首を伸べてゐた。何と云ふ色か、緑系統には違ひないが、ちやうど人形の衣裳のやうに派手で誰いところのある色合ひの、昔の人が十徳にでも着さうな石摺りの羽織をばつてりと着込んで、風通大鵬の袴の下に黄八丈の下着を見せ、袂の中から升のしきりへ肘をついてゐる左の腕をそのまゝ背中へ廻してゐるので、自然と抜き衣紋になつてゐるためか猫背が一層圓々と見える。――着附と云ひ、姿勢と云ひ、さう云ふ爺臭い風をするのが此の老人の好みであつて、「老人は老人らしく」と云ふのを口癖のやうにしてゐるのである。思ふに此の羽織の色合ひなども「五十を過ぎたら派手なものを着る方が却つてふけて見える」と云ふ信條を、實行してゐるつもりなのであらう。要が常に滑稽に感じるのは、「老人々々」と云ふものゝ此の父親はまだそれはどの歳ではない、二十五とかに結婚して、今は亡くなつたその連れ合ひが長女的美佐子を生んだとすると、恐らく五十六より取つてはゐない筈である。父の性慾はまだ變形してゐないと云ふ美佐子の觀察はそれを裏書きするもので、「お前のお父さんの老人ぶるのは、あれは一つの趣味なんだよ」と、彼もかね／＼云つてゐるのである。

「奥様、おみ、あが痛いことおへんか？ どうぞ此方へお出しやして、……………」

氣のいゝお久は窮屈な升の中でまめ／＼しく茶を入れたり、菓子すゝめたり、何を云つても振り向きもしない美佐子を相手にときどき話しかけたりして、その合ひ間には、うしろへ右の腕を伸ばして煙草盆の角に載せられた杯のふちへ手をかけてゐる老人に、なくなつてゐる頃を見はからつては、さうつと酒を注いでやつてゐる。老人は近頃「酒は塗り物に限る」と云ひ出して、その杯も朱塗りに東海道五十三次の時繪のある三つ組のうちの一つであつた。御殿女中が花見にでも行くやうにかう云ふものを研ぎ出しの提げ重の抽出しへ入れて、飲み物から摘まみ物までわざ／＼京都から運んで来るのでは、茶屋に取つても有り難くない客であらうが、お久もずゑぶん氣骨が折れるに違ひあるまい。

「お一つどうぞです？」

さう云つて彼女が、新たに抽出しから出した杯を要にさした。

「有り難う、僕は晝間は飲まないんだが、……………外套を脱いだら何だかうすら寒いから、少うしばかり戴きませう」

髪のおか、何か分らないが、忍びやかな丁子のにはひに似たものが、彼女の髪と毛と共にかすかに彼の頬にさばつた。彼は己れの手の中にある杯の、なみ／＼と湛へた液體の底に金色に盛り上つてゐる富士の繪を視詰めた。富士の下には廣重風の町の景色の密畫があつて、横に「沼津」と記してある。

「これで飲んだら、品が好すぎて頼りないやうな氣がしますね」

「さうどすやろ」

彼女が笑ふと、京都の女らしいものの、一つに數へる茄子齒が見えた。二枚の門齒の根の方が鐵漿を染めたやうに黒く、右の犬齒の上に八重齒が一つ、上唇の裏へ引つかゝるほどに尖つてゐて、それをあどけないと云ふ人もあらうが、公平に云へば決して美しい口もではない。不潔で野蠻な感じがすると云ふ美佐子の批評も酷だけれども、さう云ふ非衛生的な齒を治療しようとしないうところに無智な女の哀れさがあつた。

「此の御馳走は家から拵へて來るんですか」
要は彼女が小皿の上へ取つてくれる玉子焼の海苔巻をつまみながら云つた。

「さうどす」

「こんな重箱を提げて來るんぢや大變だな、又歸りにはこいつを持つて行くんですか」

「さうどす、芝居のものは味なうてよう食べんお云やすよつて、……」

美佐子がちらと二人の方を振り返つたが、すぐまた顔を舞臺に向けた。

要はさつきから、彼女がとき／＼足を伸ばしては、足袋の先が夫の膝頭に觸れると急いでそれを引つ込めるのに氣が付いて、かう云ふ狭い升の中に入れられた自分たち夫婦の面目を忍ぶ心づかひを、ひそかに自ら苦笑しないではゐられなかつた。彼はその氣持を紛らす

ために、

「どうだい、面白いかい？」

と、うしろから妻に聲をかけた。

「いつつも面白いものをたんと見ておいでやすよつて、たまには人形もよろしおすやろ」
「あたしさつきから義太夫語りの顔つきばかり見てゐるの、あの方がよつぽど面白いわ」
その話こゝろが耳につくらしく、

「えへん」

と、老人が咳拂ひした。そして眼だけは舞臺から放さずに、手さぐりで膝の下敷きになつた猿手の金唐草の煙草入れを捜しあてたが、煙管のありかが分らないでしきりにその邊を聞さくつてゐるのを、氣がついたお久が座布団の下から見つけ出して、火をつけてから手のひらの上へ載せてやつて、自分も思ひ出したやうに帶の間にある紅い琥珀の吸を抜き取ると、こはぜの附いた蓋の下へ白い小さな手の甲を入れた。

成るほど、人形淨瑠璃と云ふものは妾の傍で酒を飲みながら見るもんだな。——要はみんなが黙り込んでしまつたあと、ひとりそんなことを考へながら仕様ことなしに舞臺の上の「河庄」の場へ、ほんのりと微醺を帯びた眼を向けてゐた。普通の猪口よりやゝ大ぶりの杯に一杯傾けたのが利いて來て、少しちらちらするせめか、舞臺がずつと遠いところにあるやうに感ぜられ、人形の顔や衣裳の柄を見定めるのに骨が折れる。彼はじいつと瞳を

凝らして、上手にすわつてゐる小春を眺めた。治兵衛の顔にも能の面に似た一種の味はひはあるけれども、立つて動いてゐる人形は、長い胴の下に兩脚がぶらん／＼してゐるのが見馴れない者には親しみにくく、何もしないでうつむいてゐる小春の姿が一番うつくしい。不釣合ひに太い着物の裾が、すわつてゐながら膝の前へ垂れてゐるのが不自然であるが、それは間もなく忘れられた。老人は此の人形をダークの操りに比較して、西洋のやり方は宙に吊つてゐるのだから腰がきまらない、手足が動くことは動いても生きた人間のそれらしい弾力やねばりがなく、従つて着物の下に筋肉が張り切つてゐる感じがしない。文樂の方は、人形使ひの手がそのまゝ人形の胴へ這入つてゐるので、眞に人間の筋肉が衣裳の中で生きて波打つてゐるのである。これは日本の着物の様式を巧みに利用したもので、西洋で此のやり方を眞似ようにも洋服の人形では應用の道がない。だから文樂のは獨得であつて、此のくらゐよく考へてゐるものはないと云ふのだが、さう云へばさうに違ひない。立つて激しく活動をする人形がへんに不恰好なのは、さうすると下半身が宙に浮くことを防ぎきれないで、いくらかダークの操りの弊に陥るからであらう。老人の議論を押し詰めて行くと、矢張りわつてゐる時の方がねばりの感じが表はせる譯で、動くとしても肩でかすかな息をするとか、ほのかなしなを作るとか、

ほんの僅かに動くしぐさが却つて不氣味なくらゐるにまで生き／＼としてゐる。要は番附けを手を取つて、小春を使つてゐる人形使ひの名を搜した。さうして此れが其の道の人に名人と云はれてゐる文五郎であるのを知つた。さう思つて見ると、いかにも柔和な、品のいい、名人らしい相をしてゐる。絶えず落ち着きのあるほゝゑみを浮かべて、我が兒をいつくしむやうな慈愛のこもつたまなざしを手に抱いてゐる人形の髪かたちに送りながら、自分の藝を楽しんでゐる風があるのは、そゞろに此の老藝人の境涯の羨ましさを覺えさせる。要はふとビーターパンの映畫の中で見たフェアリーを想ひ出した。小春はちやうど、人間の姿を備へて人間よりはずつと小さいあのフェアリーの一種で、それが肩衣を着た文五郎の腕に留まつてゐるのであつた。

「僕には義太夫は分らないが、小春の形はいですな」

半分ひとりごとのやうに云つたのが、お久には聞えた筈だけれど、誰も合ひ槌を打つ者もない。視力をはつきりさせるために要はたび／＼眼ぱたきをしたが、一としきり身の内のぬくまつた酔ひがだん／＼醒めて来るにつれて、小春の顔が次第に刻明な輪廓を取つて映つた。彼女は左の手を内ふところへ、右の手を火鉢にかざしながら、襟の間へ顔を落して物思ひに沈んだ姿のまゝ、もうさつきから可なりの時間をじつと身動きもしないの

である。それを根氣よく視つめてゐると、人形使ひもしまひには眼に入らなくなつて、小春は今や文五郎の手に抱かれてゐるフェアリーではなく、しつかり疊に腰を据ゑて生きてゐた。だがそれにしても、俳優が扮する感じとも違ふ。梅幸や福助のはいくら巧くても「梅幸だな」「福助だな」と云ふ氣がするの、此の小春は純粹に小春以外の何者でもない。俳優のやうな表情のないのが物足りないといふ云ふものゝ、思ふに昔の遊里の女は芝居でやるやうな著しい喜怒哀樂を色に出しはしなかつたであらう。元祿の時代に生きてゐた小春は恐らく「人形のやうな女」であつたらう。

事實はさうでないとしても、兎に角淨瑠璃を聴きに來る人たちの夢みる小春は梅幸や福助のそれではなくて、此の人形の姿であらばさな、慎しみ深い女であつたのに違ひないから、此の人形でいゝ譯なので、此れ以上に特長があつては寧ろ妨げになるかも知れない。昔の人は小春も梅川も三勝もおしゆんも皆同じ顔に考へてゐたかも知れない。つまり此の人形のこはる小春こそ日本人の傳統の中にある「永遠女性」のおもかげではないのか。……十年ほど前に御覽の文樂座を覗いた時には何の興味も湧かなかつた要は、たゞその折にひどく退屈した記憶ばかりが残つてゐたので、今日は始めから期待するところもなく義理で見物に來たのであるのに、知らず識らず舞臺

の世界へ惹き込まれて行く自分を見ることは意外であつた。十年のあひだにやつぱり歳を取つたんだと、思はずにはゐられなかつた。此の調子だと京都の老人の茶人ぶりの馬鹿には出來ない。更に十年も立つうちには自分もそつくり此の老人の歩んだ道を迎えるやうになるのではないか。そしてお久のやうな妾を置いて、腰に金唐革の煙草入れを提げ、蒔繪の辨當箱を持つて芝居見物に來るやうなふうに、……いや事に依ると十年を待たないかも知れない。自分は若い時分から老成ぶる癖があつたから、人一倍早く年を取る傾向があるのだ。——要は下膨れの顔を見せてゐるお久の横髪と、舞臺の小春とを等分に眺めた。いつもは眠いやうな、ものうげな顔の持ち主であるお久の何處やらに小春と共通なものゝあるのが感ぜられた。同時に彼の胸の中に矛盾した二つの情緒がせめいだ。——老境に入ることは必ずしも悲しくはない、老境には老境でおのづからなる楽しみがある、と云ふ氣持と、そんなことを考へるのが既に老境に入らうとする兆だ、夫婦別れをしようと思ふのは、自分も美佐子ももう一度自由に復つて、青春を生きようためではないのか、今の自分は妻への意地でも年を取つてはならない場合だ、と云ふ氣持と。——

その三

「ゆうべはわざ／＼電話を戴きまして有り難

う存じました。……」

幕あひになるとるりと此方へ向きを變へた老人に、要は改めて挨拶しながら、

「お蔭さまで今日はまことに面白うございます。全くお世辭でなく、いゝ所がありますな」

「私が人形使ひぢやあないからお世辭を云はれる事はないがね」

と、老人は女物の古裂で作つた色のさめたお納戸縮緬の襟巻の中へ寒さうに首をぢぢめて、やに下つた形で云つた。

「まあ、あなたがたを誘つてもどうせ退屈だらうけれど、しかし一遍は見えて置くといふと思つたんで、……」

「いゝえ、なか／＼面白いですよ、此の前見た時とはまるで感じが違ふんで、非常に思ひの外なんです」

「もうお前さん、今あの治兵衛だの小春だのを使つた大頭株の人形使ひがゐなくなつたら、どうなるか分りやしないんだから、……」

「……」

美佐子はそろ／＼お談義が初まつたと云ふやうに下唇で薄笑ひを噛みしめながら、てのひらの間にコムパクトを隠してパツツで鼻をたいてゐた。

「斯う入りがないのは氣の毒なやうですが、日曜や土曜にはまさかこんなでもないんでせうか」

「なあに、いつでもこんなもん、……此れ

で今日らは來てゐる方です。ゼンたい此の小屋ぢやあ廣過ぎるんで、先の文樂座ぐらゐの方が、小ぢんまりしていゝんだけれど、……」

「あれは再築を許可されないらしいですね、新聞で見ますと」

「それより何より、此の客足ぢやあ引き合はないから松竹が金を出しやあしない。こんな物こそむづかしく云ふと大阪の郷土藝術なんだから、誰か篤志家が出て來なけりやあならないんだが」

「どう、お父さんがお出しになつたら？」と、横あひから美佐子が交ぜつ返した。老人は眞顔で受けながら、

「私は大阪人ぢやあないから、……此れはやつぱり大阪人の義務だと思ふよ」

「でも大阪の藝術に感心していraftしやるんぢやないの？ まあ大阪に降参しちやつたやうなもんだわ」

「お前はさうすると西洋音楽に降参の口かね？」

「さうとも限らないんだけれど、あたし義太夫と云ふものはイヤなの、騒々しくつて。」

「……」

「騒々しいと云やあ此の間或る所で聞いたんだが、あのジャズ、バンドと云ふものは、ありやあ何だい？ まるで西洋の馬鹿囃しだが、あんなものが流行るなんて、あれなら昔から日本にもある。—— テケレットテ、テットン

ドンと云ふ、つまりあれだ」

「きつと低級な活動小屋のジャズでもお聴きになつたんぢやないの？」

「あれにも高級があるのかい？」

「あるわ、そりやあ、……ジャズだつて馬鹿になりやしないわ」

「どうも今時の若い者のすることは分らんよ。第一女が身だしなみの法を知らない。たとへばお前のその手の中にあるのは、そりやあ何といふもんだね」

「これ？ これはコムパクトといふもんよ」

「近頃それが流行るのはいゝが、人中でも何でも構はずそれを開けて見ては顔を直すんだから、ちつとも奥床しさといふものがない、お久もそいつを持つてゐたんでこの間叱つてやつたんだがね」

「でも此れは便利なもんよ」

と美佐子はわざと悠々と明るい方へ小さな鏡を向けながら、キッス・ブルーフを唇へあてて丹念に紅を引いた。

「それ、その恰好がよくないよ。堅儀な娘や女房はさう云ふ形を人前で見せなかつたもんだがね」

「今は誰でも見せるんだから仕方がないわ。わたしの知つてゐる奥様で、會の時にテーブルへ着いてからきつとコムパクトを持ち出すんで有名な人があくるくらゐだわ。お皿が眼の前に出てゐるのを其方除けにして顔を直してゐるもんだから、その人のお蔭でコースがち

つとも抄らないの、あゝなられても極端だけ
れど」

「誰だい、それは？」

と、要がきいた。

「中川さんの奥様、——あなたの知らない
方」

「お久、ちよつと此の火を見ておくれ。——

」

と、老人は下腹から懷爐の包みを取り出して、

「小屋が廣いのに入りがないせあか、どうも

冷えてかなはない」

と、つぶやくやうに云つた。お久が懷爐灰の

火を直すので、手が塞がつてゐる隙に、要は

氣を利かして、

「いかゞです、胃袋の方へもう少し懷爐をお

入れになつたら」

と、これも御持參の錫の銚子を取り上げて云

つた。

舞臺の方ではもう次の幕が開きさうなけ、ひ

なの、夫がのんきらしく、キツカケを作つて

くれないので、美佐子はさつきからじり／＼

してゐた。出がけに須磨から電話があつたと

き、彼女は實は「自分はちつとも氣が進まな

いのだから、芝居の方は成るだけ早く切り上

げる。そして出来たら七時頃までに會ひに行

くやうにする」と云つて置いたのである。尤

も都合で分らないから、アテにしないでゐて

くれるとは云つたけれども、……

「明日一日、きつと此處が痛いだらうと思ふ

わ」
彼女は膝頭を揉んで見せた。

「幕が開くまでそこに腰かけてゐたらいゝ」

さう云ひながら夫が眼交ぜで、「まあ、今直

ぐ歸るとも云ひかねるから」と訴へてゐるら

しいのが分ると、それが何がなしに襷に觸れ

てならなかつた。

「廊下を——廻り運動して來たらどうかね」

と、老人が云つた。

「廊下に何か面白いものでもあつて？」

半分皮肉に云ひかけてから、彼女は冗談に紛

らしながら、

「あたしも大阪の藝術には降參しちやつた

わ。たつた一と幕だけでお父さん以上に降參

したわ」

「ふゝ」

と、お久が鼻の奥で笑つた。

「どうなさる？ あなた、——」

「さあ、僕は孰方でもいゝんだが、……」

要の方は要の方で、例のあいまいな返辭をし

ながら、今日に限つてさうしつ／＼こく「歸る

歸らない」を問題にする妻の態度に、淡い不

満を蔽ひ隠すことが出来なかつた。自分も彼

女が長居をしたくないことは知つてゐる、云

はれないでも潮時を見て器用に切り上げるつ

もりだけれども、折角呼ばれて來てゐるもの

を、せめて父親の手前だけは機嫌よくして、夫

の處置に任せてくれたら、——それくらゐ

は夫婦らしく、氣を揃へてくれたらいいのに。

「今からだ、ちやうど時間の都合もいゝし、
」

彼女は夫の顔色には頓着なく、七寶入りの兩

蓋の時計をキラリと胸のところで開いた。

「來たついでだから、松竹へ行つて御覽にな

らない？」

「まあお前、要さんは面白いと云ふんだから、

」

と、老人は何處かだ、ッ兒じみた感じの現れ

る氣短かさうな眉を寄せた。

「——さう云はないでももう少し附き合つた

らいゝだらうに。松竹なんか又出直しても濟

むんだから」

「えゝ、要が見たいつて云ふのなら見てもい

いんですけれど」

「それにお前、お久がゆうべからかゝつて辨

當を拵へて來たんだから、そいつをたべて行

つておくれ。こんなにあつちやあ私たちぢや

あたべ切れやしない」

「何お云やす、わざ／＼上つていたゞくほど

おいしいことおへんえ」

三人の言葉の取りやりを子供が大人の傍にゐ

るやうに無關係に聞き過してゐたお久は、さ

う云つてきまり惡さうに、は／＼かひに載つて

ゐた組重の蓋を直して、四角な入れ物へモザ

イクのやうに詰まつてゐる色どりを隠した。

が、高野豆腐を一つ煮るにもなか／＼面倒な

講釋をする老人は、此の歳の若い妾を仕込む

のに煮焚きの道をやかましく云つて、今では